

# 英訳から見る真宗の欧米進出

——シカゴ万国宗教会議を起点として——

嵩 宣 也

## は じ め に

近年の共同研究によって、明治期における日本仏教国際化の全貌が明らかになりつつある。ハンス・マルティン・クレーマは明治初期の島地黙雷の洋行経験を取り上げ、島地がただ単純に西洋思想を受容したのではなく、日本思想として「再概念化 (Reconception)」あるいは「充当 (Appropriation)」したことを紹介している<sup>1</sup>。このような研究動向を受け、中西直樹・吉永進一の研究では、日本仏教が明治期に国際的なネットワークをどのように構築したのか、浄土真宗本願寺派の海外宣教会による英文仏教雑誌 *The Bijou of Asia* が果たした役割が何であったのかを明らかにした<sup>2</sup>。現在ではこれらの成果を踏まえ、英訳仏書の個別事例に注目し、その内容を解説する研究が進められている<sup>3</sup>。

このように英訳を対象とした研究は少数ながら存在する。ただし、そのいずれもが特定の人物、著作、英訳語という一つの視点から論じられたものであった<sup>4</sup>。もちろん、英訳研究を進めるための基礎作業として、個別の分析が必要不可欠なことは言うまでもない。だが注意しなければならないのは、特定の英訳の「語り」のみを切り取って検討すると、その背後に存在する状況の変遷を見逃してしまう点にある。この問題を解決するためには、英訳を「点」ではなく、「線」として把握する「英訳史」という視座の構築が必要

英訳から見る真宗の欧米進出

であろう。

この問題意識に基づき、本論ではシカゴ万国宗教会議を一つの起点として、英訳の「語り」の変遷を考察する。先行研究においては、オルコットの来日からシカゴ万国宗教会議に至るまでが、「欧米仏教ブーム」だとされ、それ以降は英訳仏書、英字仏教雑誌が減少することが指摘されている<sup>5</sup>。たしかに明治20年代後半に英訳仏書および英字仏教雑誌の多くが廃刊し、日本で英訳不在の期間が訪れることは紛れもない事実である。

しかし、私見ではこの日本における英訳不在期間は、真宗の新たな「語り」を模索する重要な時期であったと考えられる。

本論では、最初にシカゴ万国宗教会議における英訳仏書の言説を追う。特にシカゴ万国宗教会議での真宗の英訳がどのような読者層を想定したものであったのかに注目する。次にシカゴ万国宗教会議での出会いを通じて、日本仏教界が *The Open Court* という新たな表現の場を得たことを確認する。最後に *The Open Court* における真宗の「語り」がいかなるものであったのかを検討し、その問題点を提示する。

以上の考察を通して、従来の研究で英訳不在とされるこの空白期間が、真宗の新たな「語り」を模索する重要な期間であったことを明らかにすることが本論の目的である。

## 1. シカゴ万国宗教会議への参加と日本仏教の動向

シカゴ万国宗教会議は、コロンブスの「新大陸発見」400周年を記念するコロンビア万国博覧会に併設する会議として、1893年9月11日から17日間に亘り、開催した<sup>6</sup>。シカゴ万国宗教会議を開催するマニフェストには「世界の各宗教とはいかなるものであったかを探求すること」が掲げられ<sup>7</sup>、特に未知なる東洋の宗教思想には注目が集まっていた<sup>8</sup>。日本の各仏教教団ヘシ

カゴ万国宗教会議への招待状が届くと、真宗からは島地黙雷（1838-1911）、南条文雄（1849-1927）といった、当時の教団の中枢に位置する人物が参加候補者として挙げた<sup>9</sup>。

シカゴ万国宗教会議へ参加を熱望する日本の仏教徒たちは「他国の宗教による侵略に対して受け身の抵抗」を示すよりも、「仏教を世界に広めるために人を驚かせるような戦略を試みるべきだ」と意気込んでいた<sup>10</sup>。すなわちシカゴ万国宗教会議は、日本から参加する仏教徒にとって、世界に日本仏教の存在を知らしめるための格好の舞台だと考えられていたのである<sup>11</sup>。

ところが、シカゴ万国宗教会議の議長であるジョン・ヘンリー・パローズ牧師<sup>12</sup>（1847-1902）がキリスト教至上主義者であり、「キリスト教の持つ可能性」を説教で論じたことが日本の各誌で報じられると、計画は乱れ始める。真宗教団の中心人物がシカゴ万国宗教会議に参加する危険性が囁かれ始めたのである。その結果、島地、南条は参加を辞退し、浄土真宗本願寺派の八淵蟠龍（1848-1926）が九州仏教同盟会の援助を受け、シカゴ万国宗教会議に参加することになった<sup>13</sup>。

結果として、日本の仏教徒たちが抱えていた疑念は的中する。シカゴ万国宗教会議では、世界の諸宗教がキリスト教のメッセージを投影したものであり、影の薄いその他の宗教は、いつの日か「十字架のまったき光」の下に暮らしている人々と釣り合う位置にまで進化していくものとされた<sup>14</sup>。主催者側のシカゴ万国宗教会議を開催する大きな狙いは、キリスト教の影響圏に諸宗教を取り込むことにあったのである<sup>15</sup>。では、こうした両者の思惑が錯綜するなか、日本仏教徒がシカゴ万国宗教会議で配布した英訳仏書はいかなるものであったのだろうか。

## 2. シカゴ万国宗教会議における真宗の英訳仏書の 「語り」とその対象

シカゴ万国宗教会議において、日本の仏教徒は合計三万冊以上の英訳仏書を配布した<sup>16</sup>。それらの書名を挙げておこなれば、①赤松連城訳 *A Brief Account of Shinshiu* (『真宗大意略説』) (1879年訳出) ②加藤正廊訳 *A Shinshu Catechism* (『真宗問答』) (1889年訳出) ③前田慧雲編、蘭田宗恵訳 *An Outline of the True Sect of Buddhism* (『真宗綱要』) (1893年訳出) ④清沢満之編、野口善四郎訳 *The Skelton of A Philosophy of Religion* (『宗教哲学骸骨』) (1893年訳出) ⑤黒田真洞 *Outlines of the Mahayana As Taught by Buddha* (『大乘仏教大意』) (1893年訳出) がある。また英訳経典としては、大原嘉吉訳「四十二章経」(1891年訳出)が持参された。驚くべきことは、日本から持参した英訳のほとんどが真宗関連であった点にある。これは海外宣教会に代表されるように、真宗が国際的な発信力を既に持っていた事実が大きかったであろう<sup>17</sup>。

だが、日本の仏教徒たちがシカゴ万国宗教会議で三万冊以上の英訳仏書を配布したにも関わらず、その報告書には日本の英訳仏書はほとんど取り上げられていない<sup>18</sup>。わずかに清沢満之の『宗教哲学骸骨』の論説が関心を引いた程度であった<sup>19</sup>。日本の英訳仏書は、シカゴで人々が待ち望んだ、東洋の未知なる宗教思想だったはずである。なぜこれらの英訳仏書は反響を呼ばなかったのだろうか。その手がかりを探るために、日本の英訳仏書の内容がいかなるものであったかを見ていこう。

先行研究においては、日本仏教徒のシカゴでの演説が「釈迦牟尼の中心化」を巧みに利用したものだとして評されている<sup>20</sup>。実は、この特徴は英訳仏書においてもよく当てはまる。特に、当時の日本仏教のなかで惹起していた

「大乘仏教は仏説に非ず」という、いわゆる「大乘非仏説論」をどのように乗り越えるかに英訳仏書の主眼があったことは間違いないだろう<sup>21</sup>。

英訳仏書を見ていくと、そのほとんどが「小乗仏教」と「大乘仏教」という構図を用いり、日本の「大乘」は「小乗」よりも優れた思想である、という立論がなされている。例えば、その構図が顕著に垣間見られる英訳仏書、前田慧雲著、蘭田宗恵訳の *An Outline of the True Sect of Buddhism* (『真宗綱要』) を一例に見てみよう。

小乗 (The Smaller Vehicle) の涅槃は、消滅した光と同じような虚無の状態です。それに対して大乘 (The Greater Vehicle) でいう涅槃は、すべての煩悩が消滅した状態なのです。これこそが涅槃の真の意味であり、「真如」というすべての功德が存在する状態であるのです。真宗の信者は、浄土に生まれるために仏の大智と大悲を受けており、仏が涅槃に至ることで、智慧と慈悲が完成するのです<sup>22</sup>。

前田は「涅槃 (Nirvana)」の言葉に注目し、小乗仏教と大乘仏教の解釈の相異を述べている。いわく「小乗」の涅槃は、明かりを消すような「虚無」の境地である。その一方で「大乘」の涅槃は、煩悩を滅し、あらゆる功德を備える「真如」の境地である。この「真如」に基づく、大智と大悲を兼ね備えた教えこそが真宗なのだという<sup>23</sup>。これらの前田の記述には、釈尊を中心としたヨーロッパでの仏教理解への危機感があったと考えられる。

近頃、仏教は西洋諸国に紹介され、教えが広がりつつあります。しかし、現在のヨーロッパ各地で広く普及している仏教は、ほとんどがセイロンやシヤムなどで説かれている小乗仏教であり、中国や日本で説かれている大乘仏教ではありません。西洋諸国に大乘を勉強しているものは、わずかながらいるのですが、聖道門の教義に従っています。聖道門の教義は厳格かつ実践することが非常に困難なため、一般人には適していません

ん。その一方で、浄土門は簡易な教義にも関わらず、最も深遠な真理を具現化しており、すべての人々に適した教えなのです<sup>24</sup>。

ここで前田は、ヨーロッパで普及する仏教のほとんどが小乗仏教だと指摘している。前田によれば、ヨーロッパでも大乘仏教を学ぶものはいる。しかし、その教えは実践が困難な聖道門の教えであり、深遠で実践可能な浄土門を知らないのだという。

さて前田がここで用いた説明は、あまりにも強引な仏教解釈に基づいている。なぜなら、ヨーロッパを起源とする、いわゆる近代の「仏教学」の類型に基づくならば、仏教は「初期仏教（原始仏教）」、「部派仏教」、「大乘仏教」という三つの系統に分類することができる。もしも、この三つの類型に基づくのであれば、いわゆる「小乗仏教」は「部派仏教」の一派に含まれる。それにも関わらず、前田の論説では「小乗仏教」と「大乘仏教」という二分法を用い、「小乗仏教」のなかに「原始仏教」をカテゴライズするという独自の分類を行っている。注目すべきは、近代仏教学の素養を兼ね備えた前田慧雲がこのような解説を用いている点にある。というのも、前田は大乘仏教の起源は大衆部にあるという「大乘仏教大衆部起源説」を提唱した仏教学者としてよく知られており、この事実からも、このような分類方法に無知であった人物とは考えづらいからである。これはヨーロッパで流行する仏教を「小乗仏教」としてカテゴライズすることで、「大乘仏教」の優越性を打ち出すための戦略であったのだろう。この一例が如実に示すように、シカゴ万国宗教会議に持参した英訳仏書の多くには、過剰ともいえるほどの「大乘非仏説論」に対する反駁精神が働いていた。

ところがその一方で、仏教の知識を全く持ち合わせていない聴衆へのケアは、ほぼ皆無であった。結果としては、これが非常によろしくなかった。たとえば、会議に参加した出席者の一人は、仏教の因果論を受けて、次のよう

な率直な感想を述べている。

あらゆる存在が相互に依存しており、それらの何一つ、もしくは、それらの全体すら、独立の存在に依拠していない世界があるならば、哲学は不可能になり、神学はその価値を奪われることになるだろう<sup>25</sup>。

上記の「独立の存在に依拠していない世界があるならば」という言葉が示すように、シカゴ万国宗教会議はほとんどの聴衆にとって「仏教」そのものの出会いの場でもあった。そうであるにも関わらず、日本の仏教徒は「小乗仏教」に対する「大乘仏教」という論法を用いてしまったのである。仏教の教義を何ら知らない彼らにとって、「小乗仏教」の理解を前提とした日本の英訳仏書の「語り」は、もはや解読不能の暗号のように思えただろう。

ところで、ここで疑問となるのが、英訳仏書にはなぜ仏教の素養を持ち合わせていない聴衆が想定されなかったのかという点につきる。というのも、真宗は明治20（1890）年にはキリスト教の一派であるユニテリアンと結びつきを持っていたことが、先行研究において指摘されている<sup>26</sup>。その事実を考慮するならば、真宗の僧侶たちは「キリスト教徒」を読者に想定した英訳仏書を持参することも十分に可能であったはずである。しかし、そうはならなかった。その理由はいくつか考えられるが、ここでは、日本の英訳仏書がこうした状況に陥ったと考えられる理由を「英訳史」という観点から二点ほど指摘しておきたい。

第一にシカゴ万国宗教会議に至るまでの真宗の英訳仏書の読者が英国を想定したものであった点が挙げられる。この事実をより明らかにするために、明治初期に始まる真宗の英訳仏書とその出版背景を概観してみよう。

真宗の最初期の英訳としては、シカゴ万国宗教会議にも持参された赤松連城訳 *A Brief Account of Shinshiu*（明治12(1879)年訳出）が存在する。その発刊目的は、真宗教義を英国議員リードに概説するためのものであった。

この赤松の英訳は、シカゴ万国宗教会議以降も海外の英文仏教雑誌に広く引用される一枚となる。

明治18（1885）年、真宗教義英訳の転換点ともいえる英訳仏書が発刊する。それが、英国総領事の James Troup、赤松連城、南条文雄らによる英訳仏書 *On the Tenets of the Shinshiu or 'True Sect' of Buddhism*（「英文真宗教旨」）である。本書では、従来の漢文を基礎とした伝統の「仏教学」ではなく、サンスクリット語を基礎とする、いわゆる近代の「仏教学」に基づいた英訳方法が採用された。これは南条文雄が、オックスフォード大学のマックス・ミュラーの下でサンスクリット語を習熟して帰国した一つの功績だといえよう。

翌年の明治19（1886）年には、日本仏教十二宗の教義英訳である *A Short History of The Japanese Twelve Buddhist Sects*（『英文仏教十二宗綱要』）が刊行される。本書では南条文雄が編集長の役割を担った。それにより、各教団の英訳はサンスクリット文献に準拠する英訳方法となった。日本における英訳仏書ブームはまだ続く。明治23（1890）年には、オルコットの *Buddhist Catechism*（『仏教問答』）に示唆を受け、シカゴ万国宗教会議にも持参される加藤正廊訳の *Shinshu Catechism*（『真宗問答』）が完成する。本書の特徴は「カテキズム」というキリスト教の布教で使われる問答形式を採用した点にある。しかし、その内容を紐解くとヨーロッパを席卷していた「釈尊中心」の「仏教学」に基づく、真宗教義の概観であった。このように、明治12（1879）年から、明治27（1894）年のシカゴ万国宗教会議に至るまで、真宗の英訳仏書の読者として想定されていたのは、ある程度の仏教学の素養を持った英国の人々なのである。

第二に日本の仏教徒たちが英国と米国の読者層の質的な相異に無頓着であった点が挙げられる。近年、吉永進一が英国と米国の仏教受容の差異につい

て、仏教学の権威が強い英国に対して、米国では仏教学の権威がさほど強くなく、宗教学が先に台頭したことを指摘している<sup>27</sup>。実は真宗の僧侶たちが、こうした米国での学術的な傾向の詳細を知るのは、1898年の北米開教の開始後だと考えられる。その証拠に北米開教の黎明期に開教使たちは、全米の大学や教育施設を視察している。そして、その報告書が高輪大学の『万国仏教青年会』の会報や、北米開教使の雑誌『米国仏教』、英文仏教雑誌の *The Light of Dharma* に数多く掲載されることになる<sup>28</sup>。日本の仏教徒たちは、米国の読者がどのような学術的な素養を持った人々なのか。その実態を明確に掴んでいなかったのである。

このように「英訳史」という観点から鑑みるに、シカゴ万国宗教会議で「小乗仏教」に対する「大乘仏教」という論法を日本の仏教徒たちが使うに至ったのは、ある意味では英国と真摯に向き合ってきた結果でもあった。シカゴ万国宗教会議の聴衆に合わせて、釈宗演が1日目と2日目の演説内容を大幅に変更したことは有名な話である。だが、既に活字化されていた英訳仏書にはこのような対応は不可能であった。

その結果、平井金三の「日本とキリスト教」の関係性を熱弁した演説がシカゴ万国宗教会議の最高潮をなす一方で、「小乗仏教」の理解を前提としたとした英訳仏書の「語り」が大きな反響を呼ぶ事はなかった<sup>29</sup>。最大の要因は、日本の英訳仏書はシカゴ万国宗教会議までは、英国人を読者として想定していたものであり、さらには日本の英訳者たちが英国と米国の読者の質的な差異を考慮できていなかった点が大きかったといえよう。

こうして、シカゴ万国宗教会議で日本仏教徒たちが目論んだ「日本仏教を広める戦略」は失敗に終わった。海外宣教会の英文仏教雑誌 *The Bijou of Asia* の廃刊に象徴されるように、欧米仏教徒との組織的な交流はなくなる。そして、伝道の主軸は、従軍布教、台湾などの植民地への伝道、あるいは日

英訳から見る真宗の欧米進出

系移民へと移っていく<sup>30</sup>。これは、まさに先行研究において描かれているとおりである。

ただし本論で注目したいのは、次の点にある。はたして、日本の仏教徒がシカゴ万国宗教会議で掲げた「日本仏教を世界へ広める」意欲も、本当にこの失敗と共に失われるのだろうか。

実はそうではない。シカゴ万国宗教会議で日本仏教の「語り」に興味を示す人物が現れる。その人物こそが *The Open Court* の創始者ポール・ケーラス (1852-1919) であった。

### 3. *The Open Court* との出会いと真宗の「語り」の醸成

*The Open Court* は1887年に創刊した宗教雑誌である。その発刊目的は、「科学の理論に基づく、倫理と宗教の構築」にあった<sup>31</sup>。従来の研究において *The Open Court* は、1897年に鈴木大拙が派遣される場所として、あるいは「科学の宗教 (Science of Religion)」の思想を生み出した雑誌として注目を集めている<sup>32</sup>。ポール・ケーラスの下で語学力を培った鈴木大拙が、米国で禅ブームを巻き起こす契機を作ることは言うまでもないだろう。

本雑誌の創刊者であるポール・ケーラスは、シカゴ万国宗教会議をきっかけに日本仏教に興味を持ち、釈宗演との書簡のやりとりを開始することになる<sup>33</sup>。*The Open Court* の誌面を見ていくと、1887年から1893年に日本仏教を紹介した論説はほとんど見られない<sup>34</sup>。だが、シカゴ万国宗教会議 (1894年) 前後に、日本仏教関連の英訳言説が増加する。そして、その執筆者の多くは、シカゴ万国宗教会議に日本から参加した面々であった<sup>35</sup>。

たとえば、シカゴ万国宗教会議の登壇者の一人でもあった岸本能武太<sup>36</sup> (1866-1928) は *Buddhism in Japan* の連載を開始する<sup>37</sup>。注目すべきは、彼の手によって、真宗の新たな「語り」が誕生するという点にある。

禅宗は本質的に「禁欲的」である、もしくは教義そのものが「汎神論」を多く含んでいるといえるだろう。その一方で、真宗は、ほとんど「一神教」と言っても差し支えないだろう。禅宗は、自らの悟りの心、黙想者以外を認めない。禅宗では、黙想者を除く、あらゆる存在を認めない。彼等にとって、世界の外部性が存在しない事実は、迷いの結果なのではないのである。一方で、真宗は阿弥陀仏があらゆる慈悲を具えた存在であるだけではなく、あらゆる存在を God として扱う。それゆえ、真宗の「阿弥陀仏」はキリスト教神学でいう「神」と「イエス」の両方の役割を果たす存在だといえる<sup>38</sup>。(引用中の「」はイタリック)

岸本の「語り」はシカゴ万国宗教会議では用いられなかった方法に基づいている。たとえば「阿弥陀仏」をキリスト教神学の「神」と「イエス」の存在に当てはめて、真宗が一神教であることを説明している。こうした「語り」は大乘を宣揚していたシカゴ万国宗教会議での「語り」とは一線を画する。つまり、米国の読者層を意識した「仏教学」ではなく、「宗教学」の方法論に基づく真宗の「語り」なのである。岸本のこの英訳方法にキリスト教と対話する意図があったかどうかは定かではない。しかし結果として、この「語り」はケーラスにとって、仏教の包括性を示す有効な手段となっていく。たとえば、ケーラスはこの真宗の「語り」を用いて、次のように説明している。

ヴォイト牧師はルター派のプロテスタントである。それゆえ、彼が言うには、仏教徒は自らの利益だけではなく、仏教にも神の恩寵のような慈愛の教えがあるべきだということである。ルター主義の人々にとっては興味深いことだろうが、実は仏教のなかにもプロテスタント主義の教団が存在する。(そして、彼らは日本で最も大きく影響を与えている教団である)それが、信心一つ (*sola fide*) で救われるという、ルターと同

様の発想に基づいた「真宗」である。彼らは肉も魚も食べ、結婚をする自由を持つ聖職者である<sup>39</sup>。

ケーラスは上記の解説の後で、赤松連城の *A Brief Account of Shinshiu* を用いり、岸本が述べたのと同様に *Amita Buddha* を *Jesus Christ* に置き換えても問題がないことを指摘している。また、後にケーラスは「阿弥陀仏」を題材に *Amitabha A Story of Buddhist Theology* を発刊する。そこでもやはり「神」と同様の存在として「阿弥陀仏」の存在が語られる<sup>40</sup>。このようにケーラスによって、真宗は米国におけるキリスト教と仏教をつなぐ結節点となる。最終的に、この真宗の「語り」は、ケーラスの元に派遣される鈴木大拙にも、形を変えて受け継がれることになる<sup>41</sup>。

ところで、ここで考慮したいことは、このような「語り」を真宗教団の人物が許容したかにある。なぜなら、先に述べたように、シカゴ万国宗教会議における真宗の英訳仏書では、いかに「小乗仏教」に対する「大乘仏教」を宣揚するかに主眼があった。*The Open Court* での「語り」には、この点が完全に看過されてしまっている。従来の英訳において排耶を展開してきた真宗教団は、この「語り」をどのように受け入れたのか。

驚くべきことに、このような「語り」に真宗教団は寛容であった。それどころか、この方法を有効に活用することで、真宗の西洋への伝道を試みたと考えられる。たとえば、浄土真宗本願寺派海外宣教会ロンドン支部会員の C. Pfounds<sup>42</sup> (1840～1907) は *The Open Court* 誌面上の *Religion in Japan* のなかで真宗とキリスト教の類似性を指摘し、「真宗のような信仰体系を持つ日本仏教が、いずれ世界の仏教徒にとってのローマ教会になる」と論じている<sup>43</sup>。

そして注目すべきは、かつての英訳で排耶を示した赤松連城ですら、キリスト教と協調する必要性を述べていた点にある<sup>44</sup>。*The Open Court* に掲載

されている赤松のキリスト教に対するインタビュー記事を見てみよう。

我々は、キリスト教が恒久的な機関であることを知っています。私が考えるに、日本でのキリスト教は海外の援助抜きで、共にやっていけると思っています。以前は、キリスト教と仏教には大きな摩擦と不信感がありました。仏教徒はキリスト教とは何かを知らずに、わずかなキリスト教徒だけが仏教を知っていました。つまり、キリスト教徒は暴力的な偏見を持ってやってきた、と無分別で不当な人々によって誇張されていたのです。しかしながら、現在では多くの有能な仏教僧たちが仏教とキリスト教が手を組むメリットがあることを自覚しています。日本で仏教とキリスト教が共存できない理由は何もありません。なぜなら、日本でも仏教とキリスト教の両方に魅力を感じる人が多いからです<sup>45</sup>。

赤松がここで見せた姿勢はキリスト教と仏教の協調の必要性である。赤松がいうには、かつての仏教徒はキリスト教に対して、あまりにも無知であった。その一方で、キリスト教徒も仏教徒のことを正しく理解していない。このような両者の溝がお互いを排することにつながっていたのだという。赤松にとって、これは望ましいことではない。それゆえ、赤松はキリスト教と仏教の関係はかくあるべきだと説示する。

私はすべての学生と友人が、キリスト教や他の宗教を学ぶことを望みます。なぜなら、ほかの宗教を学ぶことで、寛容な心を養うことができるからです。諸宗教に対して素養のある人は、自分の宗教のほうに優れているのだと、他の宗教を貶めることはありません。私は、キリスト教徒が仏教徒に改宗することを決して望みません。しかし、もしも誰かが、私の元に聞きに来たのであれば、喜んで私の教団の信条とその教旨をお伝えしましょう。そうすることは、私にとっても大きな喜びです。私はこうも信じています。すなわち、多種多様なキリスト教の教会から宣教

師が送られてくることは公正であり、適切なことである。むしろ、私は仏教かキリスト教のどちらか一つだけを国に置くことは正しくないと考えております。人々があらゆる宗教を勉強したうえで、最も適切だと考える宗教を採用するように促しています。それはあたかも、人々が世界の国々に旅をし、自分の最適な場所を探すようなものです<sup>46</sup>。

ここで赤松は、日本の仏教徒が諸宗教を学ぶべきだと述べている。しかも赤松によれば、それは一方向であってはならない。仏教徒とキリスト教徒の双方向間のやりとりに発展する必要があるのだという。このように赤松の発言には、かつて見られた強烈的な排耶の姿勢は全く見られない。それどころか、キリスト教と仏教は協調すべきだとまで主張している。もちろん赤松のこうした発言には真宗を西洋へ伝道するための戦略的な意図があった可能性は考慮されなければならない。だが少なくとも、真宗教団のキリスト教に対する排耶の姿勢の軟化も *The Open Court* における真宗の「語り」の追い風となったことは間違いないだろう。

こうして、シカゴ万国宗教会議で辛酸を嘗めた英訳者たちは *The Open Court* にて真宗の新たな「語り」を生み出した。それは「キリスト教神学」の文脈に真宗を位置づけて訳出するという、米国の読者層を想定した真宗の新たな「語り」である。しかし、この真宗の「語り」はある問題を抱えることになる。最後に釈宗演とシカゴ万国宗教会議の議長でもあったジョン・ヘンリー・バローズ牧師との対談を振り返ることで、その問題を確認しておこう。

#### 4. 釈宗演とバローズの宗教間対話と真宗の「語り」の問題点

1897年1月の *The Open Court* の誌面には、釈宗演とバローズの議論が紹介されている。問題の発端は、バローズがシカゴ大学の講義で「仏教の最終

到達点は、愛も人生も滅した、怪しげな虚無の涅槃（Nirvana）の状態に至ることにある」と解説したことに始まる。釈宗演はパローズの誤った涅槃の理解に対して失意の念を示し、「涅槃には良い側面と悪い側面があり、パローズ氏は「涅槃」の悪い側面にしか目を向けていない」と反論する<sup>47</sup>。それでは「涅槃」の良い側面とは何なのだろうか。釈は主張する。

「涅槃」の良い側面とは、真理の覚知（真如）である。それは、悪意、憎しみ、傲慢さを駆逐し、あらゆる苦を滅する、限りのない無限の愛を示すものである。一中略一この人間らしい道德律を主張したものとして、我々には光明があり、その光明そのものの気づきが仏国土をもたらすのである。あなた方はこれを神の道德律であると呼ぶのでしょうが、我々はこの道德律を無限なる光と功德を偏在する「阿弥陀仏」と呼ぶのです<sup>48</sup>。

釈の発言は次の点において画期的である。すなわち、シカゴ万国宗教会議での演説のように「小乗仏教」の「涅槃」を牽制し、「大乘仏教」の「涅槃」の優位性を説いただけではない。それに加えて、「大乘仏教」とキリスト教は近似した宗教思想であると説いたのである。最終的に、釈はパローズへの書簡を次のように締めくくっている。

私は、あなたがこうした率直な発言を嫌がらないことを願っています。ですが、私はキリスト教世界の誰かが、仏教の本当の教義を知っていなければならないと感じるのです。私は、パローズ氏が世界の宗教間対話を可能にするリーダーであると考えています。あなたが気付かない間に如来（*Tathagata*）の教えを誤解したように、私たちもキリスト教を誤解するかもしれません。あなたが仏教の教義（Religion）を正しく見ていただくのであれば、少なくともキリスト教徒の間での仏教への誤解と偏見は取り除くことができるでしょう<sup>49</sup>。

釈は、仏教徒とキリスト教徒の間にある溝を埋めるためには、宗教間対話

英訳から見る真宗の欧米進出

のためのリーダーが必要であると述べる。そして、その役割をパローズに求めるのであった。この釈の意見に対して、パローズの代弁者として、エリンウッド牧師が筆を執ることになる。

パローズ氏がキリスト教こそ全人類にとっての唯一の宗教 (Religion) であることを信じるように、キリスト教が真の救済を提供するものであることは間違いないでしょう。私は長きにわたり、自分の心を抑え、ほかの宗教の教えに耳を傾けてきました。ただ、シカゴ万国宗教会議で、それぞれがほかの宗教に敬意を持たずに勝手に自らの思想を述べるのを見たことには失望しました。一中略—*The New York Independent* の誌面にはシカゴ万国宗教会議に出席した真宗教団の八淵氏の意見が次のように紹介されているのです。「シカゴ万国宗教会議は西洋諸国にとって、キリスト教の弱体化を示した会議であった。彼らは我々の宗教を聞くことを望み、仏教がキリスト教よりも優れた宗教 (Religion) であることを西洋の人々は痛感したのである」<sup>50</sup>。

エリンウッドの返答には真宗に対する皮肉が込められている。ここでは *The New York Independent* に掲載されている八淵の言説をすべて引用してまで、宗教間対話の困難さを説いているのである。そして、牧師エリンウッドは日本仏教のなかでも真宗の特異性に注目し、反論を開始する。

最も印象が深いのは日本の真宗です。この教義は釈尊の教えよりも、キリスト教のパウロの教えに明らかに類似しています。瞑想、カルマ、煩惱の存在、および八正道ではなく、救済によった教義であること、浄土 (Heaven) に到達することで涅槃に至る、結婚の自由、そして、教会を中心に行っているという点においてもキリスト教と非常に類似しています。一中略—ただし、これが Nirvāṇa もしくは、Parinirvāṇa であるとするれば、北伝仏教のすべての教義を根本の聖典に回帰させる必要があり

ます<sup>51</sup>。

エリンウッド牧師は、日本仏教（北伝仏教）の弁慶の泣き所ともいえる「大乘非仏説論」を活用し、さらには仏教学者のウジューヌ・ビュルヌフ（1801-1852）やリス・ディヴィッツ（1843-1922）、ヘルマン・オルデンベルク（1854-1920）の仏教研究を参照し、反論する。最終的に真宗は *Religion* なのか、*Buddhism* なのかということをほのめかして、エリンウッドは筆を置いている。これに対する釈の反論は紹介されていない。ただ、パローズが4月に日本に渡航した時に詳細は話し合おうということが書かれているのみである。

両者の応酬が示すように、真宗のキリスト教の文脈を借りた「語り」がもたらしたものは諸刃の剣であった。つまり、キリスト教の信者に真宗の理解を促す入り口になった一方で、真宗が *Buddhism* なのか、*Religion* なのかという、返答困難な問題を生み出す結果につながった。そしてこの問題は翌年に始まる北米開教に関わる開教使たちにとって、解決すべき課題となっていく<sup>52</sup>。

## お わ り に

本論では、従来の研究において英訳不在とされる空白期間が、真宗の新たな「語り」を模索する重要な時期だったのではないかという試論を提示した。最後に考察してきたことを整理しておこう。

シカゴ万国宗教会議における英訳仏書では「大乘非仏説」を意識した結果、「小乗」よりも「大乘」の方が優れているという論法を用いた。だが、この方法はシカゴの聴衆たちに大きな反響を呼ぶことはなかった。本論では、シカゴ万国宗教会議における英訳仏書の失敗の原因は、真宗の英訳仏書が仏教学の権威が強い英国と向き合ってきたものであったこと、日本の仏教徒が英

国と米国の読者層の質的な相違に無頓着であったこと、にあるのではないかという私見を述べた。

結果的に、シカゴ万国宗教会議で日本仏教徒たちが目論んだ「日本仏教を広める戦略」は失敗に終わった。浄土真宗本願寺派海外宣教会の *The Bijou of Asia* の廃刊に象徴されるように、欧米仏教徒との組織的な交流はなくなる。そして、伝道の主軸は、従軍布教、台湾などの植民地への伝道、あるいは日系移民へと移っていく<sup>53</sup>。こうした状況は、まさに先行研究において描かれているとおりである。

しかし、日本の仏教徒達がシカゴ万国宗教会議を契機に *The Open Court* という新たな表現の場を得ていた事実には今まで目が向けられてこなかった。新たな「語り」の場を手に入れた日本仏教は、米国圏における「語り」を模索することになる。

その先陣を切ったのは、日本帰国後に「宗教学」の泰斗の一人にもなる岸本能武太であった。同志社大学を卒業し、ハーバード大学へ留学中であった岸本は、「比較宗教学」に基づく方法で日本仏教を論じた。そこでの真宗の「語り」に目を向けてみると、「キリスト教神学」の文脈に位置づける方法を試みた点にその画期があった。岸本がキリスト教との対話を意識したかどうかは定かではない。しかし、この真宗の新たな「語り」はブッディズムの包括性を示すための良い材料となった。そして、こうした真宗の新たな「語り」に対して、真宗教団の C. Pfoundes も赤松連城も好意的に受け止め、それを真宗の伝道のために利用しようと試みた。

だが結果として、この真宗の「語り」は返答困難な問題が生じることにもつながった。本論で紹介した釈宗演とバローズの議論が象徴するように、キリスト教の文脈を用いた真宗の「語り」は、真宗が「仏教 (Buddhism)」なのか、それとも「宗教 (Religion)」なのかという反駁が困難な問題を生み

出す結果にもなってしまった。これらの問題については稿を改めて論じたい。

従来の研究においてはシカゴ万国宗教会議を契機に日本の国際熱は冷めていくと考えられていた。しかし本論で明らかにしたように、シカゴ万国宗教会議を契機に日本仏教は新たな「語り」の場を手に入れていた。日本における「欧米仏教ブーム」の終焉は、同時に米国での「日本仏教ブーム」に向けた新たな船出を意味していたのである。

#### 註

- 1 Hans Martin Krämer, *Shimaji Mokurai and the Reconception of Religion and the Secular in Modern Japan*, University of Hawaii Press, 2014
- 2 中西直樹・吉永進一編『仏教国際ネットワークの源流―海外宣教会(1888～1893年)の光と影―』三人社、2015年
- 3 中西直樹・那須英勝・嵩満也編『仏教英書伝道のあけぼの』法蔵館、2018年
- 4 英訳を対象とする他の研究としては、現在も継続中である鈴木大拙の英訳『教行信証』研究会、*The Collected Works of Shinran*の英訳を分析対象とした武田龍精編『親鸞とアメリカ』永田文昌堂、1996年のように特定の英文著作を取り上げた研究が存在する。しかし、英訳仏書を体系的に研究成果は未だに存在しない。
- 5 中西直樹・吉永進一編『仏教国際ネットワークの源流―海外宣教会(1888～1893年)の光と影―』三人社、2015年 pp. 5-9 参照
- 6 那須理香「1893年シカゴ万国宗教会議における日本仏教代表釈宗演の演説：「近代仏教」伝播の観点から」(『日本語・日本学研究』Vol. 5 2015年)
- 7 John Henry Barrows, ed *The World Parliament of Religions: An Illustrated and Popular Story of the World's First Parliament of Religions, Held in Chicago In Connection with The Columbian Exposition of 1893* Vol.1, p. 18
- 8 Judith Snodgrass, *Presenting Japanese Buddhism to the West: Orientalism and the Columbian Exposition*, University of North Carolina Press, 2003年 参照
- 9 シカゴ万国宗教会議の日本からの参加者をここに列記しておく。日本の仏教界からは、真言宗の土宜法竜(1854～1923)、天台宗から臨済宗に転じた蘆津実全(1850～1921)、臨済宗の釈宗演(1860～1919)、真宗本願寺派の八淵蟠龍

- (1848～1926)。実行教の柴田礼一(1840～1920)や同志社の小崎弘道(1856～1938)、アメリカ在住の平井金三(1859～1916)や留学中の岸本能武太(1866～1928)などが参加した。(岡田正彦「世界中の宗教者が集まった万国宗教会議」『近代仏教スタディーズ』法蔵館、2016年) p. 44
- 10 「万国宗教大会議に就て仏教有志家の告白」(『宗教』3巻18号、1893年4月5日)
- 11 ジュディス・スノドグラス「シカゴ宗教会議のストラテジー—仏教と条約改正—」(末木文美士、林淳、吉永進一、大谷栄一編『ブッダの変貌』法蔵館、2014年)
- 12 バロウズはシカゴの第一長老派教会の首座にしてシカゴ大学宗教学科の教授であり、コロンビア万博推進委員会議の宗教大会中央委員会の座長でもあった。(ジェームス・E. ケテラー著、岡田正彦編『邪教/殉教の明治—廃仏毀釈と近代仏教』ペリかん社、2006年) p. 196
- 13 八淵蟠龍のシカゴ万国宗教会議への参加に至った詳細については、次のとおりである。
- 八淵蟠龍(1848—1926)は熊本出身の浄土真宗の僧侶だった。彼の遠征は、地元である九州の僧侶と平信徒たちからなる九州仏教同盟会の支援金にのみ支えられていた。彼は浄土真宗という「派」の代表でも全くなく、地域の人々の代表であることを強調した。これは公式の支援を得ることに失敗したことの告白というよりもむしろ、自らが在家仏教の理念に立つことを主張するものだった。(ジュディス・スノドグラス「シカゴ宗教会議のストラテジー—仏教と条約改正—」(末木文美士、林淳、吉永進一、大谷栄一編『ブッダの変貌』法蔵館、2014年) p. 154参照)
- 14 ジェームス・E. ケテラー著、岡田正彦編『邪教/殉教の明治—廃仏毀釈と近代仏教』ペリかん社、2006年 p. 214参照
- 15 ジェームス・E. ケテラー著、岡田正彦編『邪教/殉教の明治—廃仏毀釈と近代仏教』ペリかん社、2006年 p. 192参照
- 16 『真宗綱要』8500部、『真宗大意略説』2000部などを含め、合計30750部の英訳が配布されたことはわかっている。しかし、そのほかの英訳の発行部数は明らかではない。(中西直樹「海外宣教会とその時代」『仏教国際ネットワークの源流—海外宣教会(1888～1893年)の光と影—』三人社、2015年) p. 45参照
- 17 中西直樹・吉永進一編『仏教国際ネットワークの源流—海外宣教会(1888～1893年)の光と影—』三人社、2015年
- 18 John Henry Barrows, ed *The World Parliament of Religions: An Illus-*

*trated and Popular Story of the World's First Parliament of Religions, Held in Chicago In Connection with The Columbian Exposition of 1893* Vol.1, Vol. 2 では、野口善四郎の演説のなかでは、日本が持参した英訳経典と英訳仏書の題名が言及されている。しかし、他の登壇者からの英訳仏書への反応はほぼ皆無である。

- 19 なぜ清沢満之 *The Skelton of A Philosophy of Religion* が西洋の人々の興味を引いたのか。明確な理由は定かではない。西洋哲学を援用した内容であったことや *What is Religion, Definition of Religion* のように日本の宗教概念を平易に解説した書物だったことが理由としては、考えられる。実際に、翻訳の序論にあたる Preface では『宗教哲学骸骨』は宗教の概念を平易に説くことを目指したものであることが、次のように紹介されている。原文：The author says, — “The sketch is not yet complete. Can it be called the skelton of a philosophy of religion?” Thus the origin of the title. The readers are left free to add flesh and blood as he pleases. The author does not seem to do so at present. Masamaru Inaba, August, 25th. Year of Meiji」(Rev. Prof. M. Tokunaga, Translated by Zenshiro Noguchi, *The Skelton of A Philosophy of Religion*, Tokyo Kawai Bunkōdo & CO., 1893年)
- 20 ジュディス・スノドグラス「近代グローバル仏教への日本の貢献—世界宗教会議再考」(『近代と仏教』41号、2012年)
- 21 指方伊織「近代真宗史における大乘非仏説論の意味」(『真宗研究』第53号 2009年)
- 22 前田慧雲著、藺田宗恵訳 *An Outline of the True Sect of Buddhism*, The Buddhist Propagation Society Kioto, Japan, 明治26 (1893) 年 4 月11日発行, p. 17原文：According to the Hinayana (The Smaller Vehicle) Nirvāna is a state of nothingness, just as an extinguished light, but in the Mahayana(The Greater Vehicle), on the contrary it is the place where all the passions are extinguished, where is revealed the entire body of Bhutatathata(Shin-nyo) or absolute truth, and where all merits exist. This is the true meaning of Nirvāna, and is the state of Buddha who accomplishes wisdom and mercy. As the believers of this sect receive this great wisdom and mercy entitling them to be born in the Pure Land, no sooner are they born there than they attain to Nirvāna, the highest perfection of wisdom and mercy.
- 23 翻訳者の藺田宗恵が「大乘」を「The Greater Vehicle」と訳出し、「小乗」

を「The Smaller Vehicle」と表現したことからも、「大乘」の優越性を強調する態度が窺える

- 24 前田慧雲著、藺田宗恵訳 *An Outline of the True Sect of Buddhism*, The Buddhist Propagation Society Kioto, Japan, 明治26 (1893) 年 4 月11日発行, p. 18原文: Recently Buddhism has been introduced into western countries and has the tendency to spread widely, but the Doctrine that is entertained in some parts of Europe at present is that of the Hinayana, still prevailing in Ceylon, Siam, etc, and not that of the Mahayana taught in China and Japan. Even should there be in western countries a few who are studying the Mahayana it is in accordance with the doctrine of the Holy Path, whose rules are so austere that they are very difficult to practice and consequently not suitable to the common people; while the Pure Land Gate, in spite of its superficial appearance, embodies the most profound truths and is well adapted to all.
- 25 T. W. Harris, *Proofs of the Existence of God* (John Henry Barrows, ed *The World Parliament of Religions: An Illustrated and Popular Story of the World's First Parliament of Religions, Held in Chicago In Connection with The Columbian Exposition of 1893 Vol.1,*) p. 306 原文: Admit that there may be a world of dependent beings each one of which depends on another, and no one of them nor, all of them depend on an independent being, and at once philosophy is made impossible and theology deprived of its subject matter.
- 26 中西直樹「明治期仏教教団の在家者教育の一齣—1892年「文学寮改正事件」と中西午郎」(赤松徹眞編『日本仏教の受容と変容』永田文昌堂、2013年)
- 27 吉永進一「神智学と仏教、マクガヴァンとその周辺」では、次のように指摘されている。「アメリカでもイギリスでも、高邁な道徳性、人間中心主義、合理性といった点は仏教の長所として評価されていたが、アメリカでの仏教受容を特徴づける点は、仏教学の権威がさほど強くないことである。」(『現代思想』青土社、2018年10月臨時増刊号、) p. 403
- 28 たとえば、北米の仏教事情を紹介した堀謙徳の「米国開教の現状」(The Report of The International Buddhist Young Men's Association, 明治36(1903)年10月発行)では、「仏教に関する西人の知識」「米国開教の実況」などが紹介されている。
- 29 平井金三の講演が万国宗教会議の一つの最高潮をなしたことは先行研究の多

- くで指摘されている。詳細については、森孝一「シカゴ万国宗教会—1893年」(『同志社アメリカ研究』26号 1990年)、James Edward Ketelaar, *Of Heretics and martyrs in Meiji Japan*, Princeton University Press, 1990、Richard Hughes Seager, *The World's Parliament of Religions*, Indiana University Press, 1995、吉永進一、野崎晃市「平井金三とフェノロサーナショナリズム・ジャポニズム・オリエンタリズム」(『宗教研究』79号、2005年)が詳しい。
- 30 吉永進一「海外宣教会から仏教モダニズムまで」(中西直樹・吉永進一編『仏教国際ネットワークの源流—海外宣教会(1888~1893年)の光と影—』三人社、2015年) pp. 5-6
- 31 *The Open Court* の創刊号には次のようにある。原文：The Open Court A Fortnightly Journal, Devoted to the Work of Establishing Ethics and Religion upon a Scientific Basis (*The Open Court* 1887年 vol. 1)
- 32 ケネス田中「アメリカ仏教への貢献者ポール・ケーラス—キリスト教と異なる「科学の宗教」としての仏教」(『近代仏教』第20号、2012年)
- 33 釈宗演「書簡四：1958—1966」(『鈴木大拙全集』第39巻 岩波書店 2003年) p. 435, 原文：Kamakura, Japan/ Dec.16, My Dear Dr. Carus—/ It was certainly a good fortune that through the light of Buddha we met together in the hall of Truths while I journeyed to Chicago to attend the Parliament of religions. I am very glad to see your compatibility which inspired you to establish a new world of the religion of science, without any bigot [ed] adherence to Christianity or to Buddhism. As for my part, I am a Buddhist, but far from being a conservative religionist, my intention is rather to stir a reformation movement in the religious world. In other words, I am one who insists on the genuine & spiritual Buddhism to renovate that formal degenerated Buddhism. And I believe that if present Christianity be reformed it will become the old Buddhism, & if the latter be reformed it will become the future religion of science which is still in the womb of Truths, but which is steadily growing up there to focus of the power.
- 34 1887年から1893年の間で、日本仏教に関連したものとして、1891年8月6日に南条文雄とマックス・ミュラーの対談を紹介した *Bright Eyes and Dark Eyes* がある。ただし、これは日本人が執筆した英訳ではなく、二人の対談を紹介した記事である。(The Open Court August 6, 1891) 参照
- 35 1894年から1897年にかけて *The Open Court* に掲載される日本仏教関連の記事を列記しておこう。

1894年：Kishimoto Nobuta, *Buddhism in Japan* 1. *The Religion Compound in Japan* (August 16) 2. *Northern and Southern Buddhism* (August 23) 3. *Sacred Literature* (August 30) 4. *Present Condition* (September 6) 5. *The Zen and The Shin Sects* (September 27) 6. *The influence of Buddhism on the people* (October 4) Paul Carus, *The Introduction of Buddhism into Japan* (December 13),

1895年：C. Pfoundes, *Religion in Japan* (January 24), C. Pfoundes, *Religion in Japan* (January 31) Paul Carus, *A Japanese Translation of "The Gospel of Buddha"* (February 21), Ohara Kakichi, *Japanese Buddhism and the War with China* (April 18), C. Pfoundes *Why Buddhism?* (August 8), *A Japanese Buddhist Priest on Christianity* (October 3)

1896年：Ouchi Seiran translated by Keijiro Nakamura, *The Spiritual Significance of Eating from the Buddhist Point of View* (July 23), Ouchi Seiran translated by Keijiro Nakamura, *The Spiritual Significance of Eating from the Buddhist Point of View* (August 13), Shaku Soyen, *The Doctrine of Nirvana* (December 24)

1897年：A *Controversy on Buddhism* (January)

35 Kishimoto Nobuta, *The Zen and The Shin Sects*, (*The Open Court*, September 27, 1894)

36 岸本能武太という人物については先行研究において、次のようにある。「同志社からハーバードに学んだ岸本は、ユニテリアンの信仰をもつと同時に、1894年の帰国以来、いくつかの論文と、著書『宗教の比較的研究』（東京専門学校、1895年）を通じて、自らの「比較宗教学」の構想を精力的に展開していた。」（磯前順一・深澤英隆編『近代日本における知識人と宗教―姉崎正直治の軌跡―』東京堂出版、2002年）p. 25参照

37 *The Open Court* 連載の Kishimoto Nobuta, *Buddhism in Japan* の連載期間とその副題をここに列挙しておく。1. *The Religion Compound in Japan* (*The Open Court*, August 16, 1894) 2. *Northern and Southern Buddhism* (*The Open Court*, August 23, 1894) 3. *Sacred Literature* (*The Open Court*, August 30, 1894) 4. *Present Condition* (*The Open Court*, September 6, 1894) 5. *The Zen and The Shin Sects* (*The Open Court*, September 27, 1894) 6. *The influence of Buddhism on the people* (*The Open Court*, October 4, 1894)

38 Kishimoto Nobuta, *The Zen and The Shin Sects*, (*The Open Court*,

September 27, 1894) p. 4233

- 39 Paul Carus, *Christian Critics of Buddha*, (*The Open Court*, May 2, 1895) p. 4483 原文: Mr. Voigt is a Protestant and a Lutheran; therefore, he presses the point that we are justified not through our own deeds, but through God's grace who takes compassion on us. To Lutheran it will be interesting to know that there is a kind of Protestant sect among the Buddhists (and they are the most numerous and influential sect in Japan), the Shin-shiu, who insist on salvation sola fide, through faith alone, with the same vigor as did Luther. They eat meat and fish, and their priests marry as freely as evangelical clergymen. The statement made by A. Akamatsu for presentation at the World's Religious Parliament and published in leaflets by the Buddhist Propagation Society declares. 一中略一Replace the words "Amita Buddha" by "Jesus Christ" and no Lutheran of the old dogmatic type would make any serious objection to this formulation of a religious creed.
- 40 Paul Carus, *Amitabha A Buddhist Theology*, The Open Court Publishing Company, 1906
- 41 真宗が「日本仏教」と「キリスト教」の架け橋となる日本の仏教団体だという主張は、鈴木大拙の著作の中でも同様に述べられている。(D.T Suzuki, *Shin Buddhism—Shin Buddhism is Japan's major religious contribution to the West*,—Harper&Row, Publishers New York, Evanston, and London, 1970) 参照
- 42 佐藤哲朗「フォンデス もう一人の白人仏教徒」(『大アジア思想活劇』、サンガ、2008年) pp. 301-314 「C.Pfoundes は神智学に批判的な白人仏教徒として知られている。1890年の春、日本仏教界から「海外宣教会ロンドン支部」の会員に任命される。1893年1月に再来日し、日本の各地で公演を行ったことは知られているが、その後の動向は明らかではない。」
- 43 C. Pfoundes, *Religion in Japan*, (*The Open Court*, January 31, 1895) p. 4378 原文: Japan is undoubtedly at present the most important Buddhist centre; and in the future may become to Buddhism what Rome was to Christianity.
- 44 かつての赤松は排耶の姿勢を示したことは知られている。その結果、英訳のなかでも「forbid all prayers」と意図的に訳出していたことは以前に述べたとおりである。(拙論「明治初期における真宗翻訳事業とその展開」『真宗研究』

第62号、2018年) p. 4 参照

45 *A Japanese Buddhist Priest on Christianity* (*The Open Court*, October 3, 1895) p. 4662 原文: We recognize Christianity as a permanent institution. I think, judging from observation alone, that the Christian church here can get along without aid from abroad. Formerly there was a great deal of friction and distrust. The Buddhist did not know what Christianity is, and very few Christians now understand what Buddhism is. They came here with violent prejudices, which have been exaggerated by contact with indiscreet and unreasonable persons, but many of the ablest of the Christian teachers and many of the ablest of the Buddhist priest recognize that there is merit in both religions, and that both are capable of doing good. There is no reason why Buddhism and Christianity cannot exist in Japan without friction, because both appeal to the hearts and minds of men and there are those who would be better satisfied with one than with the other. The Christian have gathered in a great many Japanese who had left the Buddhist church and were without a religion.

46 *A Japanese Buddhist Priest on Christianity* (*The Open Court*, October 3, 1895) p. 4662 原文: I encourage all of my students and friends to study Christianity and other religions, because it makes them broad-minded. It can do no harm to any intelligent man to investigate other religions than his own. I would never ask a Christian to become a Buddhist, but if he should come to me and ask me to explain the creed and the principles of my religion I should take great pleasure in doing so. I believe, too, that it is fair and proper for the different churches to send out missionaries capable of teaching the principles upon which they are based, but I do not think it is right for a Buddhist or Christian missionaries to try and coax people to leave one religion and accept another. I should simply encourage all men to study all religions and adopt that which is most suitable to their taste, just as travel develops a man enables him to choose the most agreeable country to live in.

47 Rev. Shaku Soyen of Kamakura, Japan and Dr. John H. Barrows. Of Chicago Illinois, *A Controversy on Buddhism* (*The Open Court*, January, 1897) p. 43 原文: I was greatly disappointed, however, seeing that you only repeat those errors which are common in the various Western books on Buddhism. You say, "The goal which made Buddha's teachings a dubious

gospel, is Nirvāna, which involves the extinction of love and life, as the going out of a flame which has nothing to else upon.”

- 48 Rev. Shaku Soyen of Kamakura, Japan and Dr. John H. Barrows. Of Chicago Illinois, *A Controversy on Buddhism (The Open Court*, January, 1897) p. 43 原文 : The positive side of Nirvāna consists in the recognition of truth. The destruction of evil desires, of envy, hatred, extinction of selfishness implies charity, compassion with all suffering, and a love that is unbounded and infinite ...This same moral law is the source of enlightenment constitutes Buddhahood. This same moral law we call Amitābha—Buddha, the boundless light of Buddhahood which is eternal, omnipresent, and all-glorious.
- 49 Rev. Shaku Soyen of Kamakura, Japan and Dr. John H. Barrows. Of Chicago Illinois, *A Controversy on Buddhism (The Open Court*, January, 1897) p. 45 原文 : I hope you will not take offence at my frank remark, but I feel that you, if any one in Christendom, ought to know the real teachings of Buddha, and we look to you as a leader who will make possible the way for a better understanding between all the religions of the world, for I do not doubt that as you unknowingly misrepresent the doctrines of the Tathagata, so we may misunderstand the significance of Christianity. We shall be much obliged to you if in justice to the religion of Buddha you will make public this humble protest of mine, so that at least the most important misconceptions and prejudices that obtain among Christians may be removed.
- 50 Rev. Shaku Soyen of Kamakura, Japan and Dr. John H. Barrows. Of Chicago Illinois, *A Controversy on Buddhism (The Open Court*, January, 1897) p. 47 原文 : Though firmly believing with Dr. Barrows (if I may judge from an address which I heard from his lips on the eve of his departure for India) that Christianity is the only religion that is adapted to the universal wants of mankind, and the only one that offers real salvation, yet I have long cherished and widely advocated a tolerant spirit toward other faiths, and have endeavored to give full credit to the ethical or religious truths which they inculcate. But since the close of the Parliament of Religions in Chicago I have realized more than ever the need of candid accurate language in speaking on this subject, instead of giving way, either to hasty and ignorant denunciation, or to lavish expressions of approval for courtesy's sake which

might be constructed as a surrender of one's opinions. ... *The New York Independent* published a letter reporting the proceeding of a meeting held under the auspicious of the Buddhist Young Men's Association of Yokohama, and which was addressed by yourself, Mr. Yatsubuchi, and others. From one of these addresses these words are quoted: "The parliament was called because the Western nations have come to realize the weakness and folly of Christianity, and they really wished to hear from us of our religions and to learn what the best religion is. The meeting showed the great superiority of Buddhism over Christianity, and the mere fact of calling the meeting showed that the Americans and other Western peoples had lost their faith in Christianity and were ready to accept the teachings of our superior religion."

51 Rev. Shaku Soyen of Kamakura, Japan and Dr. John H. Barrows. Of Chicago Illinois, *A Controversy on Buddhism* (*The Open Court*, January, 1897) pp. 51 原文: But altogether the most striking departure from the original Arhat doctrines of the South is seen in the teaching of the Shin Shu sect of Japan. ... this sect comes nearer to the doctrines of the Apostle Paul than to those of Shakyamuni. It presents a mediator between Karma and the sinner, a salvation not by the merit, but by imputation, a renunciation of all trust in works as enjoins a consecrated service, not as compensation but from love. The heaven promised is called "Nirvāna," but it is something exceedingly attractive to the Buddhist masses. The tract approves of the marriage of priests and of all rational ways of living, and but as a dismal failure in point of fact. If, then, we are to decide upon the meaning of Nirvāna, or Parinirvāna as taught by Buddha, we must turn back from all these Northern developments to the older canonical teachings.

52 この問題は日本仏教の海外布教にかかわる人間にとって解決すべきテーマになっていく。その証拠に1907年の *The Light of Dharma* では北米開教使の内田晃融が *What is Buddhism, Buddhism a Religion?* という論題を提示し、1915年の日本の宗教雑誌 *The Mahayanist* においても、E. Uno *Is Buddhism a Religion?* を掲載し、この問題を論じている。

53 吉永進一「海外宣教会から仏教モダニズムまで」(中西直樹・吉永進一編『仏教国際ネットワークの源流—海外宣教会(1888~1893年)の光と影—』三人社、2015年) pp. 5-6